第 001 号　2020 年 6 月 14 日　江原晴郎

空飛ぶ教室

2020 年 3 月 22 日にクロアチアに留学中の日本人学生からのメールで、コロナ感染症対策として首都封鎖、大学封鎖という事実を知らされました。彼女の通う「ザクレブ経済経営大学」では、対面授業から、直ちにオンライン授業に切り替えられたとのことでした。数日後に起こった大地震で帰国を余儀なくされ、現在は日本国内から「オンライン留学」を継続しています。

反面、日本の大部分の大学はオンライン授業への移行態勢が整っておらず、日本全国の 786 のすべての大学の学生たちは 2020 年 4 月の春学期の開講時にはキャンパス封鎖を強いられたままでいました。その対応策として 5 月 1 日現在、大多数の大学は依然「オンライン授業」の開始の準備に奔走しています。オンライン授業は、テレビ会議システムを使って、リアルタイムで教員と学生をパソコン画面を通じてつなぎ、キャンパスでの対面授業に近い学習環境か、或いは教員による講義の映像に学生がアクセスできるようなシステムの構築を目指しています。このようなすべての大学によるオンライン授業の模索は、今までに経験のなかった出来事です。

授業継続という基本問題に迅速に対応できなかった、日本の大学制度の問題は、実践的に通信情報技術（ICT）を、教職員に伝達したり使用する仕組みが整っていなかったことが原因と思われます。勿論、学生の通信環境や、大学のサーバー、（コンピューター）の許容量といったハード面の制約もあります。

日本の大学では、グローバル化、デジタル化、多様性といったことが日常的に議論されながら、現在の開講へのとまどいは、テクノロジーの深化とそれを使いこなす人材が世界標準から取り残され、ガラパゴス化している姿を映しているのかもしれません。かという私は二つの大学に勤務し、オンライン授業の研修、そして実施に日夜悩まされています。

突然襲来した感染症という未曾有な大惨事をきっかけに生み出される、全大学規模のオンライン授業という「大イベント」が、危機収束後、一過性で消滅するのか、より進化した知恵として大学という「場」に蓄積され拡大、再生産されるのかを見届けたい思いです。

江原晴郎（国際教養大学客員教授・茨城キリスト教大学兼任講師）2020 年 5 月 4 日